

信は力

高橋信次たかはし しんじ

人は誰しも目的をもって生きていよう。目的のない人は、まずいなと思われる。人の目的はさまざまであろうが、その要約された目的は仏国土・ユートピアである。もしも、この目的から外れた独善なり、野望なり、あるいは混乱と争いを求める不調和が目的とすれば、目的が達成される前に、あるいは後において、目的に対する反作用が起り、その目的に対して自覚をうながすことになるだろう。

作用と反作用は、法の定めによるからである。

ともあれ、人は目的をもって生活するが、その目的達成の原動力は何かといえ、ほかでもない、それは信であり、念である。つまり信念だ。信念は行為の原動力である。ものの成否のカギを握っていよう。信念がなければ、いかなる目的も、理想も果たし得ないし、人生という大目的からも外れてくるだろう。

では何故に、信は力なのであろうか。信とは、エネルギーが集中されたものであり、力はすべて、エネルギーの集中の度合いを示すものだからである。

信が強ければ、力が加わる。弱ければ、力もまた弱い。信の強弱によって、ものごとの成否が決められてゆく。このことは読者も日常経験されるところであらう。つまり、こうなると思うと、そうなつてゆくだろう。これは何も、肩をいからせ、我武者羅に振舞うことではない。若いうちはそうなり勝ちだが、心の法を知ると、安らいだ心が広がるほど、エネルギーが集中され、物事が成就してゆくものなのである。事実、信念をも

つて、こうなると力んでみても、心の片隅に不安があると、その力は滅殺される。また、不安があると、肩をいからす格好になってこよう。不安を打ち消すために、そうなつてくるからだ。であるから、信念の要諦は、目的に向つて、そうなると堅く思い、安らいだ心で行為するときに、いかに発揮されよう。

信念は、往々にして、盲信や独善に陥る。信念はもともと、個人の心の問題であるからだ。そのため、自己の信念に対して、常に前進への反省が必要になってくる。

私たちの生活は、人と人との関係のなかで行なわれるので、自己の信念が正しいものであるかどうか。その目的意識が人との調和を乱すとすれば、改めねばなるまい。人の心を乱すとすれば、それはやがて、自分にふりかかってくるからである。

こうして、人の信念は、反省を通して、いよいよ強固となり、不動のものとなつてくるだろう。このときにおいて、私たちの信念は、偉大なる力を発揮し、人びとを教化してゆくだろう。

正法に裏打ちされた信念は、何者をも恐れぬ大きな輪となり、力となつて、自信と勇氣とを与えてくれるだろう。

正法は、信と行との生活である。信のない生活行為は、浮草同様、世のカハマの波に絶えず揺り動かされ、大事な一生を無為のうちにすごしてしまう。正法の理解が深まれば深まるほど、法の真実にふれ、まず、正しい調和の因果律にそつた生き方をとるであらう。なぜなら、自分の未来は、現在の信と行との生活にかかっているからだ。

この意味において、読者諸君は反省を通した正しい信念をもって、毎日の生活を送つて欲しいものである。

(人道科学研修所長)